

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2019 SUMMER



宇奈月ダム

絵 土田 和男

黒部川は全国でも有数の流出土砂の多い河川で、上流には5つの発電機能を有するダムが整備されている。最下流部の宇奈月ダムは、ダムに堆積する土砂を排水するために大規模のゲートが設置されている。

◆ 第7回定時総会開催報告

2

◆ 随想

4

鈴木 聖二(元新潟日报社取締役)
街が愛し、街を育てた橋

◆ 特別企画

6

令和の時代、北陸の地域づくり
北陸地方整備局 企画部長 内藤 正彦

◆ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

10

人・歴史をつなぐワクワク感で
まちににぎわいを
北國とおり町にぎわい協議会(石川県小松市)

◆ 北陸再発見

12

人生のキビを味わうソルガムエール
(長野県長野市)

◆ 特集「地域とともに」

14

中学生を対象に1/10 組立模型を
活用した雪国の建築教育に関する研究
(特非)建築・住教育研究会
-10分の1組立住宅模型を使った

◆ 会員だより

18

◆ 伝言板

20

第7回定時総会開催報告

去る6月20日、第7回定時総会をANAクラウンプラザホテル新潟において開催しました。



まず、出席会員数報告で、会員732名中、615名(委任状提出者359名含む)の出席が確認されました。新人会員は28名です。

■ 理事長挨拶

(一社)北陸地域づくり協会の第7回定時総会を開催したところ、会員の皆様にはご多用の中、多数のご出席を賜り厚く御礼申し上げます。

また、日頃から当協会の運営に対し多大なご支援、ご協力を頂いていることに重ねて御礼申し上げます。



挨拶する近藤 淳理事長

昨年は、豪雨、地震が多発し各地で大きな被害が発生しました。これを受け国土強靱化基本法にもとづく「国土強靱化基本計画」が見直され、重要インフラの緊急点検結果を踏まえた「防災・減災、国土強靱化のための3か年緊急対策」が実施されています。一方で、インフラ老朽化対策も含め「地域の担い手育成・確保」が課題となっており、いわゆる新3K「給料が良い・休日が取れる・希望が持てる」職場の実現、建設現場で働く人が誇り・魅力・やりがいを感じ

られる建設産業をつくる取り組みも進められつつあるところです。

このような状況の中、協会としては、

- ・防災エキスパートをはじめとした、大規模かつ広域的な災害への備え
- ・笹子トンネル事故を契機とした、本格的なメンテナンス時代への対応
- ・i-Construction、新技術の活用など、生産性向上の取り組み
- ・公益事業による、産官学、地域団体との連携推進

の4つを柱と位置付け、会員の皆様からのご支援を受けながら、この1年間取り組んで参りました。

協会の運営としましては、職員の努力によって業績を改善しつつあります。引き続き、働き方改革のもと労働意欲が高められるよう、環境整備に取り組むこととしております。

さて、最近では全国各地でインフラそのものを対象としたツーリズムなどが盛んに行われる様になってきました。

北陸地域においても先人たちが残した土木遺産、例えば、大河津分水路とその整備により3分の1の長さとなった萬代橋、常願寺川上流の立山カルデラからの災害を防ぐ砂防施設群とアルペンルート、金沢外環状道路など街中の道路ネットワークと大型クルーズ船の停泊を可能とする金沢港整備など、その機能を発揮しつつも、観光の貴重な資源となっています。

一般社団法人に移行し7年が経過しました。協会が持つ有形・無形の財産、特に北陸建設振興会議を通じた技術の伝承と会員相互の交流を今後も継続・発展させ、地域づくり協会の名にふさわしい法人として歩んで参りたいと存じますので、引き続き会員の皆様のご支援、ご協力をお願いし開会のご挨拶といたします。

議事

続いて、祝電披露の後、高島専務理事が平成30年度事業報告及び平成30年度公益目的支出計画実施報告を行い、第1号議案「平成30年度決算承認の件」が審議され、承認されました。

次に、第2号議案「理事（非常勤）の辞任に伴う後任者の選任の件」が審議され、事務局案どおり、宮沢啓嗣氏の後任者として、柴山圭一氏が承認され、残りの任期を務めることになりました。

最後に、第8回定時総会を令和2年6月18日（木）に開催することを確認し、総会を終了しました。

役員と体制

理事長	近藤 淳	(常勤)
専務理事	高島 和夫	(常勤)
理事	加藤 昭悦	(非常勤)
	本田 信男	(非常勤)
	柴山 圭一	(非常勤)
監事	八田 守	(非常勤)
	丸山 暉彦	(非常勤)

特別講演

◆講師 林家 木久蔵氏(落語家)

◆演題「木久蔵流 笑いから学ぶコミュニケーション術」

出囃子にのって『笑点』のレギュラー、林家木久扇氏の長男、木久蔵氏が登場。

「人は一人では生きていけない。協力を得ながら、支え合って生きていくためのツール、コミュニケーションはとても大事。会話がうまくつながると楽しく過ごすことができる。

笑いは体に良い。科学的に証明されている。笑うことで、NK細胞（ナチュラルキラー細胞）が活性化される。リウマチ患者は笑いで痛みを緩和できる。本当の幸せは何気なく暮らせること。健康が一番。健康をキープするために笑ってください」との“枕”で始まりました。



講師 林家 木久蔵氏

落語の世界は、4段階の階級制度。「見習い」1年、「前座」4年は、師匠の身の回りの世話などをしながら、“気づかい”、“気働き”を学ぶ修業時代。

「二つ目」になると、一人ひとりが会社経営者となり、自分でコンセプトを考え、自分のス

タイトルで活動できるようになる。また、師匠についてゆき、「いかに客のハートをつかむか」を学ぶ。高座での世間話（=枕）は、老若男女の割合など客層を見て、また昼食後か仕事帰りかなどの環境も考え、お客の顔に出る表情を読み取り漸に入る。これらの時代を10年ほど経て、「真打ち」となる。師匠と呼ばれ、弟子を取れるようになり、トリを務めることができるようになる。

講演途中、「二つ目」の林家 木りん君が登場し、なぞかけを行った。「『北陸地域づくり協会様』とかけて、『東京駅の新幹線ホーム』ときます。その心は『のぞみ、ひかり、かがやき』があります」と会員にアピールし、会場を盛り上げました。

むすびに、木久蔵氏は桂歌丸師匠を惜しみながら、歌丸師匠にほめられた時のうれしさを語り、笑いの絶えない90分の講演を終えました。



◆略歴

昭和50年生まれ。東京都出身。

平成7年10月 林家木久蔵（初代）「現・木久扇」に入門

平成8年2月 前座入り 芸名 林家きくお となる

平成11年9月 ニツ目昇進

平成19年9月 真打昇進。落語界初の「ダブル親子襲名」を行い、二代目林家木久蔵を襲名。

街が愛し、街を育てた橋



すずき せいじ
鈴木 聖二

元新潟日報社取締役

1954年金沢市生まれ。

1976年中央大学法学部卒業後、新潟日報社入社。糸魚川支局、長岡支局、東京支社、本社報道デスク、論説編集委員室長など経て、2018年3月に本社取締役・新潟日報事業社代表取締役を最後に退任。この間、環日本海をテーマに対岸諸国の取材など多くの連載企画を担当。「地域を元気に!」「人の魅力を伝える!」をモットーにコラムも数多く執筆。また、北陸地方整備局をはじめ行政が関わるインフラ関連のシンポジウムなどのコーディネーターを務め、萬代橋などの土木施設について発信してきた。

■ 卒寿を迎える萬代橋

初めて萬代橋と出会ったのは、1975年の秋だった。

新潟と同じ日本海側の金沢で生まれ育ち、東京の大学を経てこの年、新潟の新聞社の入社試験を受けた。

試験はともかくとして、ひょっとしたら暮らすことになるかもしれない街の匂いを少しでも嗅いでおこうと、新潟駅から新聞社のあった東中通まで歩いた。

写真では知っていた橋を渡り始めて目を奪われたのは、大小の船でにぎわう港の景色だった。当時、佐渡汽船は萬代橋に近い信濃川左岸が発着場で、視界を遮る柳都大橋ももちろんなかった。

街の真ん中に船がいる。新潟の人には当たり前前の風景かもしれないが、海水浴の浜辺くらいしか海を知らない人間にとっては、十分な驚きだった。

青空の広がった日だった。橋の真ん中で、港とその奥に覗く日本海を眺めていた日から、44年が経つ。今年8月で90歳、卒寿を迎える萬代橋の歴史の半分近くを共にしたことになる。

■ 則を越えた関わり

40年余りの新聞記者生活の折々にこの橋と関わってきた。新潟の街づくり、日本海を挟んだ対岸との交流などをテーマにすることが多かったが、その原点にはあの日の萬代橋との出会いがあったのかもしれない。

橋をライトアップしようと新潟大学の先生らを中心に取組まれた寄付金集めがあった。橋だけでなく周囲の街づくりも一体に考えようと官民を挙げて取組まれた萬代橋周辺整備の協議会や、やすらぎ堤の利用を考えるミズベリングの準備委員会にもメンバーとして参加していた。あの魅力的なアーチを下から照らして浮かび上がらせば魅力は増すはずと、学生さんたちと一緒に蛍光灯をたくさん積んだ小舟で夜の橋の下をくぐったこともある。記事だけでなく、萬代橋にかかわる本の出版に携わったこともあった。

どこまでが取材で、どこまでが当事者なのか。記者としての則を越えてしまっていたのかもしれない。だが、それも萬代橋がこの町の街づくりに決定的な役割を担っていると感じていたからだと思う。



平成16年、重要文化財指定を祝い、建設当時の姿に復元された照明灯・橋側灯。橋側灯の設置資金の9割は市民の募金活動で賄われた。

この橋が、用、強、美の全てにおいて傑出した日本を代表する橋の一つであることはよく知られている。計画、設計に当たった若い技術者たちは、機能でも、強度でも、美観でも、求め



三代目萬代橋、柳都大橋、上流から日本海を望む

られる以上のレベルを目指し最先端の知識と技術を投入した。

路面電車の導入も想定して十分な強度と広さを確保した設計は、その後の新潟地震にも耐え、増え続ける交通量を支える都市軸としての役割を果たし続けた。

デザインでも、6連アーチの半径を微妙に変え、上部構造を限りなく薄くすることでリズム感と軽快感を持たせていることも有名だ。

それだけではない。欄干や橋詰の親柱には日本橋などにみられる過剰な装飾は一切ない。関東大震災後の建築で予算が限られていたせいではない。直線的な意匠の街灯なども含め、当時世界的潮流となりつつあったモダニズム建築の思想をいち早く取り入れたものだと知ったときは、その先進性に驚かされた。無駄のないその姿は、新潟の広い空に似合っている。

■ 萬代橋の魅力を生かす街づくり

ただ、萬代橋が90年にわたって、この街のシンボルであり、市民の求心力の中心であり続けているのは土木建築物として優れているからだけではない。大河信濃川とメインストリートの交差点、都市の「へそ」ともいえる立地はもちろんだ。下流を見れば、開港5港の歴史を誇り、今も現役である港があり、上流を眺めれば越後平野の守り神である弥彦山を遠く仰ぐという景観もある。それらが市民の暮らしや記憶と結びつき、時の流れの中で積み重なって重層的な魅力を深めてきたのだろう。

そして、萬代橋がつなぐ両岸のコントラストが、この橋をより際立たせる。

駅、港、空港、幹線道路の交通結節点が集中し、ビジネス、商業ゾーンとしてにぎわう右岸。左岸は伝統と文化を漂わせ、背後の森を隔ててこの街の原点である日本海につながる「古き町」だ。未来をにらむ「活力」と、時の流れが育んだ「潤い」が、この橋で出会う。

「令和」の英訳は「ビューティフル・ハーモニー」だそうだ。活力と潤いの調和が問われる時代だ。新潟の都市計画の中に萬代橋をどう位置づけるのかと考えるのではなく、この橋の特性と魅力を生かすためにどのような街づくりをしていくのかと考える方が、この街を輝かせる近道なのではないかとさえ思える。

90歳と言えば人生の締めくくりのころ合いだが、この橋はバリバリの現役であり、主役だ。交通量は最盛期の半分ほどになっているが、それはこの橋の可能性を広げているととらえるべきだろう。道であり、広場であり、美しい建築物であり、地域愛の象徴であり続ける。老後は無いのだ。

40余年前の出会いの時と比べ、周辺も美しく整備され、橋を包み込んでいるようだ。街が愛し、街を育てたこの橋は、幸せな橋だと思うし、どこにもない宝物を持った市民も幸せだと思う。これからも市民に愛され、この街の成長を見守っていくに違いない。

10年後の100歳の誕生日にはどんなプレゼントをしようか。いまから考えておくのも楽しみだ。

(萬代橋写真提供：国土交通省 新潟国道事務所)

「令和の時代、北陸の地域づくり」

国土交通省 北陸地方整備局 企画部長 内藤 正彦

1. 北陸の国土強靱化 — 減災・防災、 国土強靱化3か年緊急対策を契機として —

国土や地域の安全・安心という視点では、平成は、国民の記憶に残るような多くの自然災害に見舞われた時代といえます。これは、平成16年、23年の新潟・福島豪雨、平成16年の中越地震、19年の中越沖地震、能登半島地震に代表されるように、北陸においても例外ではありません。

現在、信濃川大河津分水路改修事業（新潟県）、利賀ダム建設事業（庄川、富山県）、常願寺川水系（立山カルデラ）における直轄砂防事業（富山県）といった、事業全体でみると長期間を要する事業を着実に実施する一方で、河川内の樹木伐採や河床の掘削等により洪水時の水位の上昇を抑えたり、地質の悪い山地部の道路脇の斜面の崩落を抑えるような、地道な対策を限られた予算の中で実施するのは難しく、後者については災害復旧に併せ実施するなど、被災地以外では地域の期待どおりに防災対策が進められなかったというのが平成終盤の状況であったともいえます。



信濃川大河津分水路改修

平成最後の年である昨年の災害が端緒となって、近年激甚化している災害により全国で大きな被害が頻発している状況から、総理の指示のもと取りまとめられた「重要インフラの緊急点検の結果及び対策方針」等を踏まえて、特に緊急に実施すべき対策として全体で160項目の対

策からなる、7兆円規模の「防災・減災、国土強靱化のための3か年緊急対策」が平成30年12月に閣議決定されました。

初年度（平成30年度）の対策として速やかに着手すべきものについては第二次補正予算として配分され、北陸地方整備局では827億円（うち直轄事業で335億円）の予算により早期の工事発注に取り組んだところです。引き続き令和元年度予算と合わせて、「防災・減災、国土強靱化のための3か年緊急対策」をしっかりと進めていきます。

2. 北陸の地域資源

北陸は、日本列島を縦断する標高3,000m級の山々から日本海沿岸地域に至る変化に富んだ自然を有しており、急峻な地形、脆弱な地質、急流河川を形成し、日本有数の降水量や冬期の厳しい季節風・降雪など、自然災害が発生しやすい条件下にあります。一方それらは美しい景観や多様な生態系と豊かな水環境を育んでいます。

また、砺波平野や越後平野に代表される田園風景、全国に知られる温泉地、世界文化遺産に登録された五箇山の合掌造り集落、日本三大名園の一つにあげられる兼六園、遺跡が良好に保存されている佐渡金銀山等の歴史文化遺産や文化的景観、さらには豊かな食材や食文化等、歴史・文化を活かした多くの観光資源に恵まれています。近年では北陸新幹線の開業や多様なルートのクルーズ船の就航を契機に観光客、特に訪日外国人が年々増加し、インバウンド需要が高まっているのと同時に、県を越えた広域観光のニーズに応える必要もあると考えます。

3. 北陸を中心とした日本海沿岸の広域連携

北陸は、三大都市圏のいずれからとも300km圏内にあって、日本列島の中心に位置しています。経済成長の著しいアジア諸国・極東ロシアと日本海を挟んで対面しており、これらの国々と三大都市圏を結ぶ連携軸と日本海側の国内各都市間との連携軸が交差する中枢拠点として地理的優位性を有しています。

また、広大な県土を持つ新潟県が典型ともいえるように、県都や圏域の中心都市に向かう道路が整備されてきましたが、一方で県境部には地形・地質・気候条件の厳しさがあり、それを克服するため令和元年の現在、以下のとおり多数の事業を進めています。北陸地方整備局、NEXCOと測量・地質・設計コンサルタント、建設会社の皆様の技術力をしっかり発揮して安全かつ迅速に事業を進めていく必要があります。

- 新潟県と山形県をつなぐ「国道7号朝日温海道路（日本海沿岸東北自動車道）」
- 新潟県と福島県（会津地方）をつなぐ「磐越自動車道（4車線化）」、「国道289号八十里越」
- 新潟県と群馬県をつなぐ「国道17号三俣防災（事前通行規制区間の解消）」
- 新潟県と長野県をつなぐ「上信越自動車道（4車線化）」

- 富山県と岐阜県をつなぐ「東海北陸自動車道（4車線化）」、「国道41号猪谷楡原道路（事前通行規制区間の解消）」
- 石川県と富山県をつなぐ「国道8号倶利伽羅防災（事前通行規制区間の解消）」
- 石川県と福井県をつなぐ「国道8号牛ノ谷道路（4車線化）」

地域の経済や暮らしを支える道路をはじめとする広域の基幹的な交通ネットワークは、広域的な防災活動を可能にし、災害時においても国民生活や産業経済活動を支える代替ルートとなりますが、近年の災害の教訓から、その役割を確実に果たすには4車線が確保されていることが最低条件といえます。

令和最初の北陸地方整備局の予算は、事業費で4,801億円（対前年比1.24倍）で、うち直轄事業が1,749億円（対前年比1.29倍）と10年ほど前の水準となりました。県や市町村が執行する補助・交付金も3,052億円（対前年比1.21倍）となっています。

2月に成立した平成30年度補正予算と令和元年度の当初予算を合わせて、前年当初の1.5倍となる予算規模であります。確実に執行し、同時に、これまで進めてきた建設分野の働き方改革、生産性向上とともに担い手の確保にも取り組み、さらにその歩みを加速していく必要があります。



4. 建設分野の働き方改革、生産性向上と 担い手の確保 ー新3Kの実現にむけてー

前述の「減災・防災、国土強靱化3か年緊急対策」は、3年分の事業量（対策箇所数や対策延長）を明記して、令和元年度と2年度は当初予算で手当てされ、新3K「希望が持てる」に一步近づいたといえます。知事、市町村長からは地方整備局長との懇談の場において、この3か年緊急対策を高く評価のうえ、何らかの形で継続を求める声が強く寄せられています。

一方、事業量が増える中でも、働き方改革、生産性向上と担い手の確保は全ての公共事業発注機関と建設産業全体が真正面から取り組むべきテーマです。働き過ぎを防ぎながら、ワークライフバランスと多様で柔軟な働き方の実現を目指す政府の取り組みの一環として、建設業界においても積極的な取り組みが期待されています。

北陸地方整備局では、『建設業働き方改革加速化プログラム』に沿って、取組を進めています。

○週休2日の推進（新3K「休暇が取れる」）

建設業界におけるワークライフバランスを推進するためには、週休2日が実現できる適切な工期設定が重要であり、北陸地方整備局では、平成30年度より週休2日モデル工事において発注者指定型を新たに始めるとともに、対象工事の範囲を拡大して取り組みました。その結果、対象の332件の工事のうち6割を超える209件（いずれも4月末時点の集計）で週休2日に取り組むことができました。

また、建設産業全体として週休2日の取り組みをさらに進めるためには、各発注機関が統一的に現場閉所に取り組むことも重要であり、建設業の働き方改革に向けた取り組み姿勢を示すため、工期にGWが含まれる全ての工事を対象に、発注機関が連携しGW期間（令和元年は10連休）の現場閉所を各発注機関から受注者へ提案しました。（なお、GW期間全ての現場閉所が困難な場合は、土日やそれ以外の連続した日

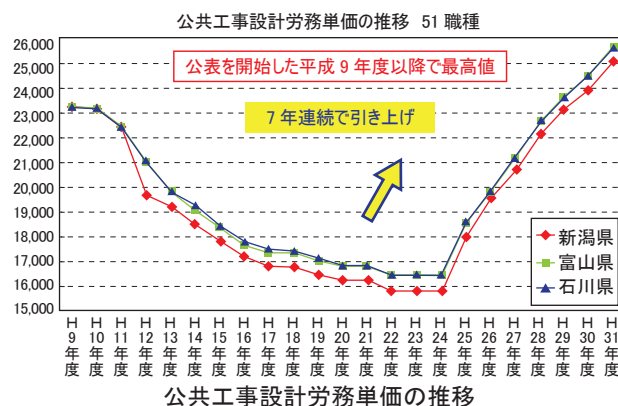
など一部期間を現場閉所とするよう受発注者間での調整が可能としました。）北陸地方整備局の工事では、対象の491件の工事のうち約9割（430件）で10連休とすることができました。

令和元年度は、週休2日の対象工事を発注者指定型で約50件、受注者希望型で500件の工事に拡大して、建設産業における担い手確保に向けた働き方改革を継続・推進します。

○適切な技術者単価、設計労務単価の確保 （新3K「給料がよい」）

災害時をはじめとして地域の守り手である建設産業が持続可能であるためには、その担い手である若者にとって魅力ある職場である必要があります。

令和元年度の設計労務単価については、7年連続の引き上げ（技術者単価も同様）となり、北陸3県（新潟県、富山県、石川県）では、前年に比べて平均で4.9%の増加となり、労務単価の公表を開始した平成9年度以降において最高となりました。



○生産性の向上（「i-Construction 貫徹の年」）

北陸地方整備局では、i-Construction 推進本部を立ち上げ、3本柱である、「ICT技術の全面的な活用」、「全体最適の導入（コンクリート工の規格の標準化等）」、「施工時期の平準化」を推進してきたところです。

ICT活用に向けた講習会・見学会・報告会の開催を引き続き継続するとともに、①砂防現場における i-Construction の導入を加速させ

るため「チャレンジ砂防プロジェクト」の新規立ち上げや、②北陸のICT施工を牽引してきた技術者による「北陸トップランナー意見交換会」を開催し、ICT普及・拡大に繋げるニーズを引き出すとともに、③ICT導入の投資判断を行う経営者へ直接訴える「経営者クラス」の講習会を開催します。

また、BIM/CIMの活用を先導する全国で10の「モデル事務所」の1つに北陸地方整備局の信濃川河川事務所が選ばれました。

ICT活用工事の実施例は着実に増えていますが、これまでは建設会社がレーザースキャナーやUAVによる起工測量により3次元データを作成して実施しているものであり、測量会社や建設コンサルタントによる3次元の測量や設計の成果（データ）を建設会社がICT活用工事そのまま活用しているものではありません。信濃川河川事務所の大河津分水路改修工事では、測量、設計、現場施工、出来型管理の一連のプロセスで3次元データの受け渡しを実践し、省力化と効率化を実現することを目指しています。

現在の技術水準はそれを実現するに足ると考えていますが、いずれの測量会社、建設コンサルタントの3次元データをいずれの建設会社が受け取ってもスムーズに現場施工や出来型管理ができるまでには多くの実践例を必要とします。年次目標を共有して課題をひとつひとつ解決し、着実に前進させることが期待されます。

生産性の向上には、技術面のブレイクスルーのみならず工事の繁忙期と閑散期をなくす施工時期の平準化も重要なテーマです。

北陸ブロック発注者協議会では、品確法運用指針のうち重点3項目について全国統一指針を設定し、取組を進めていますが、「施工時期の平準化」についても目標値を設定し、改善に向けた取り組みを実施しています。

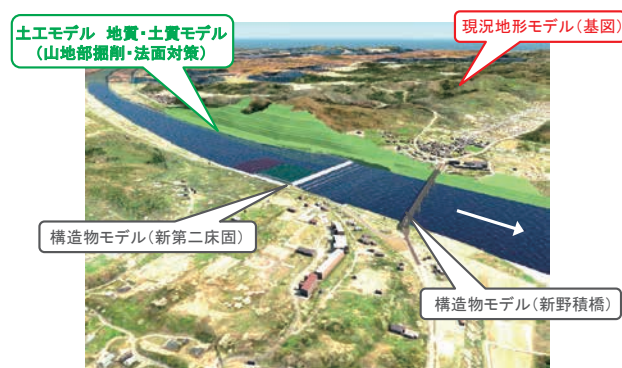
工事については、事業内容に応じて、当初予算にゼロ国債を設定し、計画的な早期発注による年内工期の設定、予算の繰越制度の活用により出水期前等を工期末に設定するなど、柔軟な

工期の設定に取り組んでいます。さらに、工事の完成時期を左右する道路の開通時期、事業の完了時期についても、例えば道路事業では、北陸特有の気候である「冬期降雪時の施工」や「年度末繁忙期の業務・工事の集中」を避けるため、開通時期を「年度末」から「夏頃」か「年内」に見直しました(5つの事業)。業務においても、当初予算からゼロ国債、繰り越し制度等を活用し、平準化を図ることにしています。

引き続き、建設産業全体の生産性の向上に努めていきます。

去る6月5日、7日には、公共工事の品質確保の促進に関する法律（品確法）、建設業法などのいわゆる「担い手3法」が可決成立し、改めて発注者の責務が明確化されました。

北陸地方整備局としても法律の基本理念（目指すべきところ）に沿って、適切な工事・業務の実施を通じて、安全安心、豊かで「希望が持てる」地域の暮らしと経済・社会の発展に貢献していきたいと考えています。



BIM/CIM活用業務（大河津分水路の改修）



ICT活用工事見学会
ICT施工(MGバックホウ)法面成形の搭乗体験

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

人・歴史をつなぐワクワク感でまちににぎわいを

北國とおり町にぎわい協議会（石川県小松市）



1. イオンモール新小松で子供歌舞伎をPR（2017年5月）写真提供：まいぷれ小松編集部

2.3 「小松市どんどんまつり」等、周辺イベントと連携し開催した「北國とおりまちマーケット」。サーカスのようなワクワク感の創出に合わせ作成されたテント前にスタッフ集合

JR 小松駅りゅうすけから歩いて5分、旧北国街道沿いにある龍助町・西町。金融機関、医院、事業所等が立地し、小松市の経済を牽引するまちとして発達してきた。無電柱化等の整備を機に、にぎわいあるまちの再生を目指し、若い商店主たちが精力的に活動を展開している。「北國とおり町にぎわい協議会」会長の中出 暁史さん、金田 奈津代さん、橋本 真由美さんからお話を伺った。

■ 絢爛豪華な曳山と子供歌舞伎

「龍助町の曳山は一番背が高く、祭りが終わった後も解体しない」と中出さんが蔵に保存されている曳山を見せてくれた。「2年前に車輪を新調し、尾根の漆と金箔も大修理し、LED照明をつけより豪華になった」と誇らしげだ。

江戸時代から、この界隈の町は「お旅まつり」を盛り上げるため、曳山の豪華さを競い、そこで演じられる子供歌舞伎で華を添えてきた。現在、8基あり、毎年2町が当番町として子供歌舞伎の上演を行っている。「曳山」が町衆の心意気を見せる舞台であることが伝わってくる。

■ 無電柱化整備を機にまちづくりを検討

市道の無電柱化等の計画が発表され、2014年2月、3つの部会、「まちづくり部会」、「みちづくり部会」、「にぎわい部会」で構成される「龍助町・西町北国街道まちなみ協議会」が結成された。まちづくりの方針、まちの景観、イメージなどを話し合い、まちづくり協定を作成した。まちづくりのコンセプトは「町衆文化の代表である『曳山』が似合う通り」。通りに残る「こまつ町家」^{※1}を保存し、一般建物との調和を図

り、伝統を受け継ぎつつ、「新しさ」や「こだわり」を持つ粋な町衆のなりわいが感じられる通りを目指している。

「電線に曳山の一番上についていた飾りが絡まり落下、ヒヤリとしたことがある」と電線がなくなった通りで、曳山を運行する日を心待ちしている。



無電線化後のイメージ
(2021年完成予定)



龍助町の誇り。曳山と大獅子

東京で働き、それまで気づかなかった龍助町の良さを実感し、この町で暮らす決心をしたという中出さんは「この町の素晴らしさを知ってもらいたい。祭りの準備で集まる機会が多い、みんなで何かしたい」という想いが日増しに強くなっていった。無電柱化事業完成後も継続的にホームページの運営やイベントを開催できるよう、にぎわい部会のメンバーに呼びかけ「北國とおり町^{※2}にぎわい協議会」を2017年3月に結成した。

※1 昭和の大火を教訓に延焼を防ぐ袖壁、通りに面して格子戸を設けている。隣りの家と接する屋根は切妻平入り。

※2 小松市龍助町・西町及びその周辺地区を「北國とおり町エリア」という。



左から橋本さん、金田さん、中出さん

■古いものと新しいものに出会える町

ホームページ制作に先立ち、まちのイメージを伝える「ロゴマーク」を議論し、龍助町・西町の道路に残っている“小松城奇襲を防ぐクランク”



をデザイン化した。先人たちが築きあげてきた「歴史」と現代の新しい「文化」が共存する通り、古いものと新しいものに出会えるワクワク感に満ちた人がにぎわう町にしたいという想いを込めた。

2018年10月、「北國とおり町マーケット」を町民やボランティアの協力を得て開催した。通りを歩行者天国にし、中央にサーカステントを置き「ワクワク感」を創出した。飲食店、雑貨店が出店し、古本市、町屋カフェなども開催、約6,000人が訪れた。

「こまつ町家」が数多く残る北國とおり町でもひとときわ目を引く、創業360年、独自の焙煎で人気の加賀棒茶の「長保屋茶舗」。



今も残るこまつ町家「長保屋茶舗」

このタイムスリップしたかのようなお店のギャラリーで、アニメ「ガリー・エアフォース」のパネル展が4月19日から開催されている。航空自衛隊小松基地を舞台に正体不明の飛行物体と戦闘機で闘うSFで、主人公の自宅がこまつ町家という設定になっているからだ。

アニメゆかりの地を訪れる「聖地巡礼」として、小松に来てもらおうと企画した。

当初、4月19日～5月末までの開催予定だったが、予想を超えるアニメファンが来場し、9月末まで延長されることになった。「アニメは人を呼ぶコンテンツになる。北陸にある聖地と協力ツアーを企画したい」と期待を込める。



ギャラリーでアニメパネル展を開催中

■新しいつながりで町の魅力を発信

金田さんは、「なりゆきで、こまつ町家文庫の代表となったが、どんどんこの町が、ここに住んでいる人たちが好きになっている。これからも、ここでゆったりと流れる時間を過ごしていただけるような事を考えていきたい」と話す。橋本さんも、個性あふれるお店があり、話しを聞いてみたい人がいてこの町に通っているうちにこまつ町家文庫で働き、まちづくりにも関わられるようになったそう。



防災訓練後の交流会

若手が次々に打ち出す企画に、先輩たちは、温かく見守り、裏方に徹して協力してくれる。祭りだけでなく、消防団の活動、防災訓練も定期的に行い、その後の交流会にはイベントに協力してくれた学生も招いている。

お祭りに関わっていない人たちとも生活に役立つ講習会などを開き交流の場を設け、「町のみんなが幸せだという一体感を醸成したい。同時に、この町の人や文化に共感する人たちと新しいつながりを築き、その中で町の魅力を発信したい」と走り回っている。

イオンモール新小松開業時には、子供歌舞伎出演者が店内を歩くイベントを持ちかけ、買物客にPRをした。ホームページで、町の魅力的な人をシリーズで紹介する「北國とおり物語」をスタートさせるなど情報発信に力を注ぐ。

中出さんたちの熱意に引き込まれ、イベントに協力してくれる若者が現れ、金沢大学地域創造学類のゼミで1年間、とおり町の活動を題材に研究したいという申し出もあった。「とにかく住んでいる人がすごい。まずこの町に来てほしい」と橋本さんからハッシュタグを習い発信している中出さん。

先人達の暮らしが感じられる佇まいを背景に、世代を超えた強い絆で演出される祭りやイベントに、今、新しい役者や演目が加わり、町はにぎわいを増している。

取材協力

北國とおりまちにぎわい協議会

【HP】 <https://hokkoku-toorimachi.com/>

人生のキビを味わうソルガムエール（長野県長野市）



これまで味わったことがない、さわやかな味が口に広がる信州ソルガムエール。ソルガムきびからつくられる発泡酒には、「少しでも長く、元気に暮らしてほしい」という中山間地で働くお年寄りへの想いが込められている。



信州ソルガムエール（左）とジェラート



毎年、桜が咲く頃行われる感謝イベント「ソルガムエールを飲みつくせ」

古くて新しい食材

「ソルガムきび」は、アフリカ原産のイネ科の一年草で、世界5大穀物の一つで、形状はトウモロコシに似ている。アフリカ、インド、中国で広く栽培され、日本でも「タカキビ」、「モチキビ」、「コーリヤン」などと呼ばれ、古くから栽培されてきた。近年、アレルギー物質を含まず、ポリフェノールやGABAといった高機能性成分が豊富な健康食品として注目されている。



2000種類以上もあると言われていたソルガムきび。写真は信州大学が試験栽培しているミニソルゴー

長野市の中山間地では、人口の流出と高齢化により担い手が減り、耕作放棄地の拡大が大きな問題となっている。市は、乾燥や害虫に強く、稲作に比べ草取りなどの手間が掛からず、中山間地の急傾斜地に多い耕作放棄地でも栽培できるノンアレルゲン農作物としてソルガムきびに着目し、ソルガムきびの栽培・収穫、2次利用、

商品開発、栽培技術の普及、流通網の整備等に2012年から、信州大学と共同で取り組んでいる。

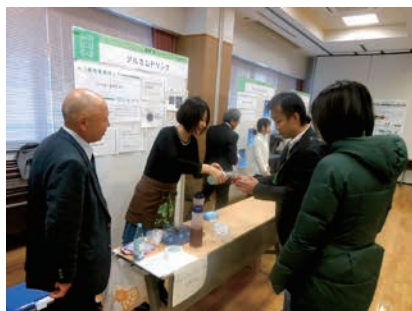
ソルガムきびでビールづくりに挑戦

信州ソルガム（株）取締役会長の鎌倉彬さん（74）は、留学中にお世話になった家族に会うため毎年渡米する中で、アメリカ人の食に求めるものが、「おいしさ」から「健康」に変わってきていることに気づいた。ソルガムきびは、健康や美容に関心のある人たちから「スーパーフード」として注目されている。

出身地の小川村では、モチモチとした食感のソルガムきびが栽培され、「アカモチキビ」と呼び、餅にして食べていたことを思い出した。

「日本でもアメリカと同じような流れが生まれるだろう」と、保有する山で10年ほど前に栽培を始めた。さらに文献を調べていくと、アフリカでは、昔からソルガムきびを醸造したビールを飲んでいたことが分かった。「長野には地ビールがない。ソルガムでビールをつくってみよう」と挑戦が始まった。鎌倉さんがソルガムきびを栽培していることを知った長野市の職員から、「共同研究に参加してみないか」と誘われ、ソルガムきびの商品開発に取り組むことになった。

ビールの主原料となる大麦麦芽をソルガムきびに代えて製造してみたが、大麦に比べ糖質が足りず満足できる味に仕上がらなかった。大麦を加え製造することとし、2015年秋、試行錯誤の末に発泡酒ができた。「ソルガム健康食品コンペティション」(長野市・信州大学主催)に出品、「チャレンジ部門賞」を獲得し商品化することになった。



「ソルガム健康食品コンペティション」
で対応する鎌倉さん親子

信州大学の協力を得て、東京のデパートで開催された「大学は美味しい!!」フェアで「ソルガムエール」の販売をスタートさせた。

柿のフルーツビールを開発中

当初、信州大学と共同で販売することにして、信州大学の都合もあって、会社を設立。鎌倉さんが会長、長女の希旭ひかるさんが社長となり、酒類製造免許を取得し、「信州ソルガムエールきらり煌り」として販売することになった。

ソルガム麦芽が絶妙な味を醸し出し、「おいしい。今まで飲んだことがない味だ!」と評判が良い。きめ細かい泡、フルーツを思わせる爽やかな香りと甘みは女性に人気だという。「ソルガムエールを使ったアイスをつくりたい」と地元アイスメーカーからオファーがあり、2017年にはジェラートの共同販売も始めた。

発泡酒、アイスクリームが好評だったことから、昨年「フルーツビール」に取り組んでいる。世の中にはチェリー、ラズベリー、オレンジ、バナナ、苺、マスカットなど、さまざまな果物を使ったビールがあるが、“人のまねをしない”が信条の鎌倉さんは、これまで使われていないフルーツ、信州産の市田柿いちだなど渋柿を使うことにした。今秋販売予定だという。

ソルガムきびがつくる新しい風景



鎌倉さんが焙煎した
ソルガムきび

ソルガムきびの畑は、3 haから4 haに増え、ソルガムエールの売上げも順調、需要に追いつかないほどだという。原料となるソルガムきび以外の大麦、ホップも、徐々に自家栽培に移行し、焙煎まで自社で行っている。委託している醸造も、犀川水系沿いの名水に恵まれる信州新町に適地がみつき、醸造所建設の目処がたった。「これまで以上に個性的な味に仕上げられる」と意気込んでいる。

「背が高く伸びたソルガムきびを曲がった腰を伸ばして刈るお年寄りの姿には頭が下がる。急傾斜地をもくもくと耕してきた人生を、少しでも長く、豊かに暮らせるようソルガムきびを使った酒をつくり応援していきたい」と、次は「赤い酒」を計画している。

いつの日か、急傾斜地でお年寄りがソルガムきびを生産し、信州産ソルガムビールのファンと集う姿が「新ナガノ百景」になるだろう。



信州新町の棚田
(写真出典: ながの百景)

取材協力

信州ソルガム株式会社
長野県長野市大字三輪 1290-20
TEL : 026-237-6177
<https://ja-jp.facebook.com/shinshu.sorghum/>

特集「地域とともに」

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、公益事業として、地域活性化の成果が期待できる事業を募集・採択・支援する「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を実施しています。

今回は、第23・24回事業で支援している「(特非)建築・住教育研究会－10分の1組立住宅模型を使った」の活動を紹介します。

中学生を対象に1/10組立模型を活用した雪国の建築教育に関する研究

(特非)建築・住教育研究会－10分の1組立住宅模型を使った ■理事長：後藤 哲男／理事：広川 智子

1. 研究の背景・必要性

約半世紀前の住宅造りは、我々の身近にあった。大工さんの仕事ぶりは子ども達の憧れの的であり、上棟式(餅まき)は、棟が上がったお祝いと工事の安全を祈る「地域のイベント」であった。

しかし、柱や梁が見える真壁(写真1)、雪の荷重や地震に耐える構造、暖かく住むための工夫など雪国の風土で培われた木造住宅の仕組みは、日常的に見えなくなった。原因は、建物を覆う安全ネット、商品化住宅の普及、大壁(柱や梁が壁に覆われる)やプレカット工場の普及と工期短縮などが考えられる。その結果、子どもの頃から建築に関して日常生活の中で学ぶことが難しくなり、建築への興味・関心・知識が希薄になっている傾向となった。

近年、頻繁に発生する地震や建物の環境負荷を軽減するため、安全で快適に住まう省エネなど様々な問題が浮上している。いつの間にか専門的となった建築は、命と生活環境に関わる個人レベルで考えられなくなっている。それらの問題を再認識し、次世代に向けて再びこの建築知識を一般化する必要があると考えた。

建築や住生活を最初に学ぶ機会は小中高等学校での家庭科(衣食住)だが、現在の家庭科のカリキュラムでは住教育の比率が少なく、生活要素の創意工夫に留まり、建築の領域(システムや原理)にまで踏み込んでいない実態が報告されている。

そこで本研究では、雪国で培われた建築知識を普及させるために中学生でも分かりやすい可視化された縮尺1/10の組立式の建築模型(以下、模型とする)を開発し、短時間で楽しく学ぶ体験型の教育方法を提案している。

中学生には、空間認識を高め、義務教育で学

ぶ原理原則から応用された建築の仕組みを理解する力があると考えます。本研究の目的は、建築講座の実施と教養としての雪国建築の知識の普及である。



写真1 昔の住宅(長谷川邸)
新潟県長岡市塚野山にある重要文化財の
旧長谷川邸住宅の室内の様子

2. 研究のスケジュール(2018年度)

2.1 既往研究を調査・発表

はじめの研究内容は、以下の3点である。

- 1) 既往研究を調査し、現在の地域の特徴を踏まえた建築教育の現状と傾向を分析する。
- 2) 日本建築学会主催の研究発表を聴講、また本研究の今までの活動と今後について発表する。
- 3) 雪国で培われた木造住宅の特徴を把握するため現地調査を行う。

- ・4月～6月は、日本建築学会公式HPで「建築教育」をキーワードに論文を検索分析した。
- ・6月12日(火)(建築会館ホール)「2018年度子ども教育支援建築会議全体会議・シンポジウム 子ども教育支援のための建築とまちのプラットフォーム」に参加、研究発表した。
- ・7月4日(水)富山県の雪国の家調査・砺波平野を視察(写真2)。
- ・7月7日(土)～8日(日)(金沢工業大学)日本建築学会北陸支部大会に参加、研究発表した。



写真2 砺波平野（富山県）

2.2 試作品の制作・教育方法の提案

模型を活用して雪国に特化した建築全般（計画・環境・構造・施工）にわたって学ぶ教育方法の提案を行う。

はじめに構造に関する教材を開発した。

屋根に積もる雪に相当する教材として、雪の比重 0.25（建築基準法・多雪地域は 0.3）と同じ杉材（0.24～0.3）を白い布袋に入れ積雪時を想定し製作する。杉材の厚みは、25 cm と 50 cm の 2 種類を用意し模型を組み立て、その垂木の上に乗せることにより積雪時の量の違い（25 cm、50 cm）を比較することができる。

また、積雪時に地震が起きた際の揺れ方、建物の上に重いものが有る場合と無い場合の影響を確認し、耐震構造の強度を実感できる。次は、軸組模型に耐震要素（筋かい等）を追加し、再度振動を加えて観察する。この現象を単純にモデル化して補足説明するために補助教材（写真3）を活用する。

受講する前段階として中学生には、自分の家の雪国の特徴（柱の太さ等）を調査してもらった。

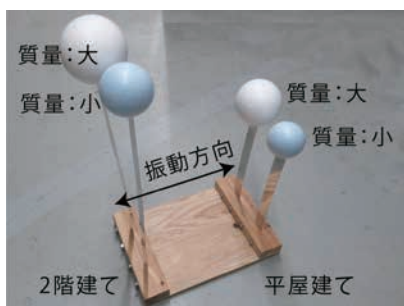


写真3 補助教材

2.3 中学校との打ち合わせ

建築講座を受講する中学校との事前打ち合わせでは、建築講座の主旨、具体的な講座内容、日程、会場の確認を行う。確定後、交通手段、会場の手配を行う。直前打ち合わせでは、身近な家の観察を行う「事前学習」と、講座で組み立てる「2階建の住宅平面計画」のための資料

配布を中学校へお願いする。後日、受講する生徒は事前学習と宿題に取り組んでもらう。

2.4 建築講座の実施

中学1年生から3年生を対象に建築講座を1日3時間、2日間にわたって行う。また、小学生を対象としたイベント（わくわく科学フェスティバル 総勢800名以上が来場）にも参加し、その1ブースに本研究の内容も取り入れ、小学生の反応や効果を確認する。またTA（ティーチングアシスタント）として長岡造形大学 小川峰夫教授の協力のもと大学生が参加する。

〈建築講座「地震に強い木造の家の仕組みを1/10の組立模型で体験してみよう」〉（写真4）

- ・ 期日：7月27日（金）（長岡市立山古志中学校）
- ・ 実施時間：3時間
- ・ 受講者数：4名（1.2年）
- ・ 実施場所：ロータリーハウス山古志・山の学校
- ・ 主講師：後藤哲男、TA：3名（広川智子など）



写真4 積雪時の模型全体

〈建築講座「明るく涼しい家をつくるー採光と日射遮へいー」〉

- ・ 期日：7月31日（火）（長岡市立山古志中学校）
- ・ 実施時間：3時間
- ・ 受講者数：4名（1.2年）
- ・ 実施場所：長岡造形大学・202講義室
- ・ 主講師：飯野由香利（新潟大学 教授）
TA：2名（後藤哲男、広川智子）

〈第14回わくわく科学フェスティバル ふれてわくわく、さぐってびっくり育てよう科学の心〉

建築ブース「1/10組立模型を使って耐震建築を作ってみよう！・紙を折って建築を作ってみよう！」（写真5）

- ・ 期日：8月8日（水）（三条市教育委員会）
- ・ 実施時間：5時間30分

- ・受講者数：約 100 名（主に小学生）
- ・実施場所：三条市栄体育館
- ・主講師：後藤哲男、TA：小川峰夫（長岡造形大学教授）、木原隆明（長岡造形大学元非常勤講師）、長岡造形大学小川峰夫研究室 4 年、3 年 9 名・広川智子）



写真5 わくわく科学フェスティバル

〈建築講座「地震に強い木造の家の仕組みを1/10の組立模型で体験してみよう」〉

- ・期日：9月19日（水）（長岡市立北中学校）
- ・実施時間：3時間
- ・受講者数：21名（3年）
- ・実施場所：長岡造形大学 202
- ・主講師：後藤哲男 TA:2名（広川智子など）

〈建築講座「地震に強い木造の家の仕組みを1/10の組立模型で体験してみよう」〉（写真6）

- ・期日：9月20日（木）（長岡市立北中学校）
- ・実施時間：3時間
- ・受講者数：21名（3年）
- ・実施場所：雪国植物園 木遊館
- ・主講師：後藤哲男、TA:2名（広川智子など）



写真6 建築講座（北中）

2.5 既往研究を調査・発表

9月4日（火）～6日（木）（東北大学 川内北キャンパス）「2018年度日本建築学会大会〔東北〕」に参加、研究発表

2.6 研究のまとめ、研究成果

本研究の建築講座後のアンケート調査から分

析・考察・有効性を研究助成事業報告書にまとめる。研究成果を長岡造形大学研究紀要、新潟県生活文化研究会、日本建築学会に投稿し研究成果を報告する。

3. 建築講座の実施内容と成果

3.1 建築講座の内容

長岡市立北中学校の建築講座は、2日間3領域（建築の計画・構造・施工）を繰り返しながら展開する（表1）。1班（2名～3名）は模型1台を取り扱う。模型のボリュームは平屋建てから2階建てへ徐々に大きなものを組み立てる。

1日目		2日目	
はじめに(アンケート)		はじめに(アンケート)	
	①事前学習の発表	計画	①宿題の発表 ・講師やTAから質疑応答
施工	②木造建築ができるまで ・雪国の家とは？		
施工	③模型の説明、取扱い方法	施工	②模型を用いて2階建てを組み立てる ・宿題を見ながら組み立て
計画	・縮尺1/10、尺貫法、畳の敷き方		
構造	④耐震構造の原理 ・門型から1坪	構造	③2階建ての耐震補強、揺れの実験 ・積雪、補助教材
施工	⑤模型を用いて平屋建てを組み立てる		
構造	⑥平屋建ての耐震補強、揺れの実験 ・積雪	計画	④家庭でできる地震対策 ・避難経路
計画	⑦家庭でできる地震対策 ・避難経路		
まとめ(感想、アンケート)		まとめ(感想、アンケート)	

表1 建築講座の内容

1日目は、

- ①中学生から事前学習（身近な家の観察）の調査結果を発表してもらう。
- ②調査結果を踏まえ、TAが木造建築ができるまで（施工）の様子と雪国の地域の仕組みの違いをパワーポイントのスライドで解説する。
- ③模型を手で扱いながら部材の種類、縮尺、尺貫法、畳の敷き方を学ぶ。
- ④耐震構造の仕組みでは、門型と1坪を組み立て体験する。
- ⑤模型で平屋建ての軸組（柱・梁のみ）を組み立て、自ら手で揺らし（水平力を加える振動実験）建物の不安定な状態を確かめる。
- ⑥模型に耐震補強（筋かい等）を追加し、再び振動実験を行い、安定したことを確かめる。
- ⑦模型内に本棚などの家具を追加して振動実験を行う。この時に家具の転倒に対して家庭でできる地震対策（避難経路の確保）について考える。

2日目は、

- ⑧中学生は全員の前で宿題（2階建の平面計画案）を発表する。

- ⑨発表した平面計画案に沿って2階建ての模型の軸組を組み立て、振動実験を行い建物の不安定な状態を確かめる。
- ⑩模型に耐震補強を追加し、再び振動実験を行い、安定したことを確かめる。
- ⑪積雪教材をのせて振動実験を行う。この時に振動の現象を単純にモデル化した補足説明をするために補助教材を活用する。
- ⑫模型内に家具を追加して振動実験を行い、転倒から安全な避難経路について考える。
- ⑬各班の完成した模型を全員で見て回り確認する。

2日間の教育内容は、雪国の家の仕組み(構造・施工)に関する事前学習の発表と模型の組み立ての体験である。方位と間取りの関係については、宿題(平面計画案)の発表時に主講師とTAが中学生に質問しつつ解説した。

3.2 雪国の家について考えた割合・理解できた割合

雪国の家に関する考察や理解度の割合を図1に示す。受講前の事前学習を行った段階では、雪国の家について「少し考えた」の割合が75%と最も多かったが、1日目の講座後は、雪国の家について「理解できた」の割合は80%まで高まった。

さらに、2日目の講座後は雪国の家について「理解できた」の割合は94%と、ほぼ理解できたことが分かった。

以上の結果から、この要因が、自らが調査して考えたこと、加えて建築講座での原理解説と模型を使った体験学習であり、雪国の家に関する理解に役立つ講座内容であると結論づけられる。

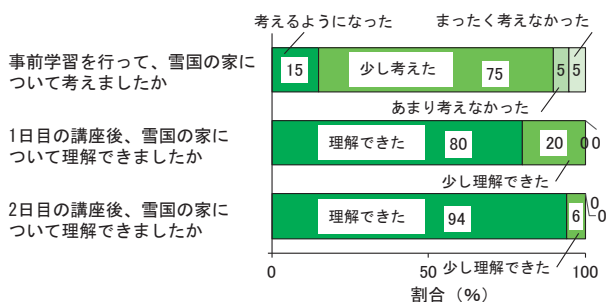


図1 雪国の家について考えた割合・理解できた割合

3.3 建築講座で面白かった内容

建築講座を受講して「面白かった」と答えた内容を図2に示す。最も高い割合は「模型を組み立てる」が100%であった。次に「雪をのせた振動実験」が78%、「耐震方法(筋かいなど)」が67%であった。

これは、模型を組み立てる作業や雪をのせた振動実験など、手で扱う体験や家が雪に押しつぶされそうな不安感を可視化することによって実感できたことが、「面白かった」に繋がったと考えられる。

その反面、「自分の考えた間取りを組み立てる」が11%と低い結果であった。方位を含めた住宅平面計画を宿題としたが、意図が伝わらず、面白さを感じてもらえなかったことが分かった。方位を理解するための工夫など、今後検討が必要である。

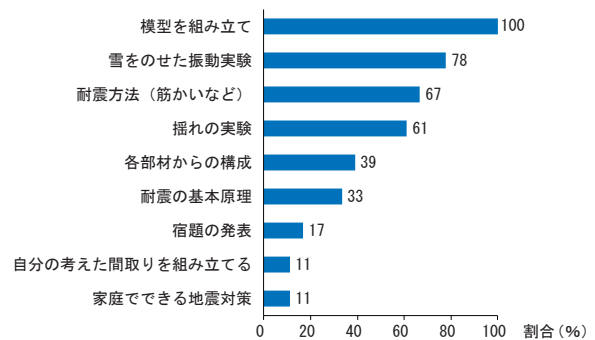


図2 建築講座で面白かった内容(複数回答可)

4. NPO活動として





2008年から長岡造形大学の研究活動として小中高校生を対象に建築講座を実践してきた。2018年4月に文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞し、本講座の意義が社会的に認められたと考えている。

そのため、本講座を継続することを決意し、特定非営利活動法人として再出発すべく準備を進め、2019年3月22日に「特定非営利活動法人建築・住教育研究会-10分の1組立住宅模型を使った」(新潟県長岡市渡里町4-16 ひぐまビル1階 101)が設立された。

今年度はこの法人が活動の主体となり、建築教育の充実・普及に努めていく。

会員だより

「令和元年春の叙勲」で、栄えある勲章を4名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。3名の方からご寄稿いただきました。

瑞宝中綬章	瑞宝小綬章	瑞宝双光章	瑞宝双光章
			
白波瀬 正道氏 (神奈川県横浜市在住) 元北陸地方建設局 局長	山本 雅史氏 (山口県宇部市在住) 元北陸地方建設局 黒部工事事務所長	片野 実氏 (新潟県新潟市在住) 元北陸地方建設局 総務部総括調整官	永田 伸之氏 (新潟県新潟市在住) 元北陸地方建設局 企画部環境審査官

※官職は北陸地方建設局在職時のものです。

感謝 | 山本 雅史

令和の時代になって初めての叙勲におきまして、瑞宝小綬章受章の栄に浴しました。

これは偏に国土交通省(建設省)の先輩の方々のご指導・ご鞭撻、そして同僚、後輩の皆様のご協力・ご支援の賜物であり、心より感謝申し上げます。

私の北陸地整(地建)での勤務は黒部工事事務所長としての2年間だけでしたが、ちょうど昭和から平成に移るときでした。そしてまた令和の初年度に、こうして『地域づくり in ほくりく』を通じて、皆様に叙勲への感謝を述べていることに何か不思議なものを感じます。

黒部工事事務所は、河川系事業をフルセットで所管する事務所であり、どの事業においても思い出はたくさんありますが、ひとつに絞るとすれば、工事が始まったばかりの宇奈月ダムのことでしょう。直轄としては初の土砂吐を有し、しかもすべてのブロックの構造が異なる複雑な形状をしたダムでしたが、3Dプリンタなどまだ考えられもしない時代だったので、厚いベニヤ板を各断面の形に切り出して立体模型を作り、本省や土研の指導を仰ぎながら設計を詰め

ていきました。そのダムも完成から早や20年近く経ち、月日の経つ早さを実感しております。

私は、昨春すべての職を退き、山口県宇部市で妻と暮らしております。北陸とは遠く離れておりますが、最近、“宇奈月”との縁をつなぐものを発見しました。宇部市では1961年から野外彫刻の公募展が隔年開催され、世界各地から数多く応募されてきます。その優良作品が、市街地やときわ公園の湖畔に展示されていますが、その中に『宇奈月』と題された作品があったのです。作者が、宇奈月で見つけた7m余りの倒木を型に取ってブロンズで仕上げたシンプルなものですが、宇奈月の地形や気候の厳しさを知る私には、直立する細身のこの像がたまらなくけなげに見えるのです。これからずっとこの像を見る度に、北陸に暮らした2年間を思い出すことでしょう。

終わりに、皆様方の益々のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。



『宇奈月』

恐縮至極 ■片野 実

令和元年春の叙勲に際しまして、はからずも瑞宝双光章を受章させていただきました。

天皇陛下のお代替わりによる日程の関係で、例年の会場から変更になったグランドプリンスホテル新高輪の『飛天の間』での勲章・勲記の伝達式の後、皇居に参内し豊明殿（3日後にトランプ大統領の宮中晩餐会が行われた部屋）に

おいて天皇陛下に拝謁し、お言葉を賜りました。もとより浅学菲才のこの身には、あり余る光栄であり恐縮至極でございます。

これもひとえに建設省、国土交通省での33年間の勤務を通じて、ご縁をいただいた全ての皆様の温かいご指導・ご支援の賜物であり、改めて本紙をお借りして心から感謝を申し上げます、御礼のご挨拶とさせていただきます。

誠にありがとうございました。

おもいで ■永田 伸之

このほどは、はからずも令和元年春の叙勲で瑞宝双光章を拝受しました。これもひとえに上司、同僚、後輩の方々のご指導ご支援の賜物と、深く感謝申し上げます。

かえり見ますと、昭和35年関東地方建設局渡良瀬川上流工事事務所に採用され、昭和42年北陸地方建設局企画室に転勤、以来、新潟国道・長岡国道工事事務所、北陸技術事務所、清津川ダム調査事務所、道路部、企画部を最後に平成11年に退職いたしました。

この39年間で特に印象の強い事柄は、渡良瀬川上流工事事務所にて岩井分水路固定堰のコンクリート配合設計、材料試験室の立ち上げ、現場監督。入所まもない若造にこのような機会を与えていただき、この経験が以降の仕事の自信に結びついたと思う。

企画室では「北陸地方建設局10年史」の編纂で多忙極まりない時期に、手伝いもしていない私を「電話の留守番も執筆者を支えてくれた」と、遠慮する私を後目に、編集委員として私の名を掲載。嬉しかったですね。仕事の流儀の一端を教えていただいた。

長岡国道工事事務所では、今後事務所で取り組むべき雪対策を、KJ法を使って抽出、整理。この方法を教えていただいたおかげで、これがその後の仕事に大いに役立った。

北陸技術事務所では、北陸地方の「平野部の地盤図集」作成で、技術書として相応しい文言を上司と一緒に腐心し、技術者としての在り方を学んだ。簡易地吹雪防止柵の設計要領の立案にあたっては、観測時に運よく猛烈な地吹雪に遭遇、雪を知る貴重な体験もできた。

道路部では、社団法人雪センター主催による「米国の冬期道路管理体制調査」の一員に推挙していただき、環境にやさしい凍結防止剤CMAの使用実態、登坂不能車を押し出す作業車、チェーン着脱場での有料装着・脱着業務などを見聞できたことにも感謝したい。

北陸地方建設局の設置使命の一つに、「雪災害から国民を守りその生活基盤を築くこと」があげられていました。私の勤務した39年間のうち、大半は現在の北陸地方整備局管内の道路の調査・計画に関する仕事であり、ましてや自分の故郷の道づくりに関わったことに、深く感謝する次第です。



伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
高瀬渓谷フェスティバル 2019	7月13日(土)	長野県大町市 大町ダム周辺	ダム内部見学、龍神湖巡視体験等	大町ダム管理所 TEL:0261-22-4511
おおいしダム湖畔まつり	7月27日(土)	新潟県関川村 大石ダム湖畔県民休養地 周辺	大石ダム見学、発電所見学、 ウォーキングラリー等	大石ダム管理支所 TEL:0254-64-2251
しゃくなげ湖まつり	7月28日(日)	新潟県南魚沼市 三国川ダム周辺	ダム操作室、監査廊見学、 巡視船体験試乗等	しゃくなげ湖畔開発公社 TEL:025-774-2200
ほくりく防災・減災考座 2019	7月31日(水) 15:00~17:15	新潟市中央区 アートホテル新潟駅前 4階「越後」 定員:150名	講演①「防災に生かせるか? 地名への視点を問う」 講師/本井 晴信 氏 新潟県立文書館 元副館長 講演②「参加型」防災のデザイン」 講師/松田 曜子 氏 長岡技術科学大学 環境社会 基盤工学専攻 准教授	北陸地域づくり協会 企画事業部 (北陸地方防災 エキスパート事務局) TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:7月24日(水)
若郷湖さわやかフェスティバル 2019	8月3日(土)	福島県会津若松市 大川ダム及び 若郷湖東公園	ダム・発電所見学、スタンプラリー、ダム湖巡視体験等	大川ダム管理支所 TEL:0242-92-2839
白い森おぐに湖体験	8月4日(日)	山形県小国町 横川ダム周辺	横川ダム・横川発電所見学、 カヌー体験、木工教室等	横川ダム管理支所 TEL:0238-65-2363
第17回 萬代橋誕生祭	8月24日(土)	新潟市中央区 萬代橋周辺	水辺のコンサート、オープンカフェ、屋形船ガイド、色彩ワークショップ、萬代橋パネル展等	萬代橋誕生祭実行委員会事務局(中央区建設課) TEL:025-223-7410
けんせつフェア 北陸 in 富山 2019	10月2日(水) 9:30~17:00 10月3日(木) 9:00~16:00	富山県富山市 富山産業展示館 (テクノホール)	「次世代へ、イノベーションをもたらす建設技術」をキャッチフレーズに、新技術・新工法を「みて、ふれて、知る」	■「けんせつフェア 北陸 in 富山 2019」 実行委員会事務局 ■「令和元年度建設技術報告会」実行委員会事務局 (北陸技術事務所内) TEL:025-231-1281(代)
【同時開催】令和元年度建設技術報告会	10月2日(水) 10:40~16:20 10月3日(木) 9:40~15:20		基調講演、官公庁及び民間の建設会社において、新たに研究開発された新技術・新工法等の報告会等	

※都合により変更になる場合がございます。事前にお確かめの上、お出かけください。

編集後記

令和最初の会報、編集を終えて感じたのは「古くて新しい」。土木・建築技術、お祭り、食材等々。先人から受け継がれてきたものが、時空を超え輝いてみえる。

今、多くの地域で地域資源を見直し、地域づくりに取り入れようとしている。その動きが地域の誇りとなり、地域の絆を強固にし、新しいつながりを生む原動力となっている。

前会報担当部長は白根大風合戦に新しいチームをつくり参戦し、活動を通じ知り合った佐渡の鬼太鼓グループとも交流していた。こんな古くからの地域コミュニティと共通の価値観を持った人たちとの新しいつながりが、令和の地域づくりのカギになりそうだ。(事務局)

地域づくり in ほくりく 第19号

発行 令和元年7月4日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>